ICO Topical Meeting on Polarization Optics 参加報告

市川裕之
（愛媛大学工学部）

6月29日（日）から7月3日（木）にかけて，フィンランドのカレリア地方の中心地 Joensuu（ヨエンスウ）郊外の Polvijärvi（ポルヴィヤルヴィ）で開催された，ICO Topical Meeting on Polarization Optics に参加しました．その名の通り，光の重要な基本的性質のひとつである偏光に関係する研究者を一堂に集めて議論しようとの試みと理解しました．ただ，実際には，Topical Meeting と称しながら，何でもありの様相も呈していました．招待および一般講演数は，それぞれ線形光学7と20，非線形光学4と8，量子光学2と2で，46件のポスターの9割近くは線形光学に関するものでした．残念ながら，量子光学の関係者はほとんど参加していなかったようです．なお，招待講演には，ほぼ例外なく年齢・実績ともに重鎮クラスを配置していると感じました．

一方，参加者は5大陸30か国から140名近くに及んでいます．日本からは6名が参加し，招待講演1件を含む6件の発表でした．

なお，現地実行委員会として表でも裏でも走り回っていた Joensuu からの参加者を差し引いても，フィンランドの参加者は16名と圧倒的に多かったです．このあたり，人口比率を考慮すると，現在のフィンランドの光学界の異常な盛況ぶりを垣間見ることができるのではないか，とのコメントが ICO Bureau メンバーから出ていました．

会議の開催場所は人里から遠く離れた森の中，湖の畔という典型的なフィンランドの風景の中のリゾート施設 Huhmari（図1）の借り切りです．このような所に大学でもめったにないような立派な会議設備（図2）があることに多くの参加者は驚いていました．特に，傾斜が急なため，どの席に着いても決して前の人間の頭が邪魔にならない点が非常に良かったです．宿泊施設については平均4人向けのバンガロー風の小屋を，家族同伴者以外は単独使用という贅沢なものでした．遅れて申し込んだ参加者のため，現地スタッフの泊まる部屋がなくなり，実行委員長ら2名以外は自宅から毎日30分以上車をとばして通勤するはめになったとのことです．

会議の冒頭は，R. A. Ganeev（ウズベキスタン科学アカデミー）によるガリレオ・ガリレイ賞の受賞記念講演，および E. Wolf（米国ロチェスター大学）によるヤングの干渉の実験に関する基調講演です．Young がこのやがて歴史に残ることになる研究を投稿した折，評価されず，どんなにひどく酷評されたかということを，その多くの批評・批判文章をスクリーンに映して紹介した上で，会場にいる若い研究者たちを激励していました．原稿を準備したしっかりとした内容で，とても1か月後には81歳になるとは思えない元気な姿でした．

招待講演では，量子力学の歴史に“ベリーの位相”（光学，**20**(6)，p. 346 参照）として名前を残す M. Berry 卿（英国ブリストル大学）の講演などもあり，一般講演も合わせて，全体的にレベルの高い内容の発表が多かったと感じました．質疑応答でも，「もう時間がないから，後でコーヒーを飲みながら続きをやってくれ」と座長が制する場面も頻繁にみられました．その一方で，線形光学と非線形光学の研究者間では普段あまり顔を会わせる機会が少なく，互いの関心も多少ずれているためか，質問の少ないセッションもありました．

この他，フィンランドの隣国といえるエストニア，ラトビア，リトアニアの3国が，昨年，ICO への加盟を認められたことを記念して，Baltic Welcoming Session と称した，各3国の光学界の現状を紹介する招待講演もありました．

筆者個人についていえば，日常と離れた状態の中で，普段あまり接する機会のない内容の発表をじっくり見聞きし

E-mail: hichikaw@dpc.ehime-u.ac.jp

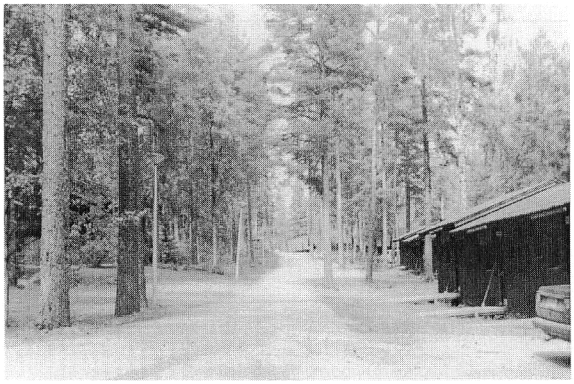

図1　会場付近の風景.

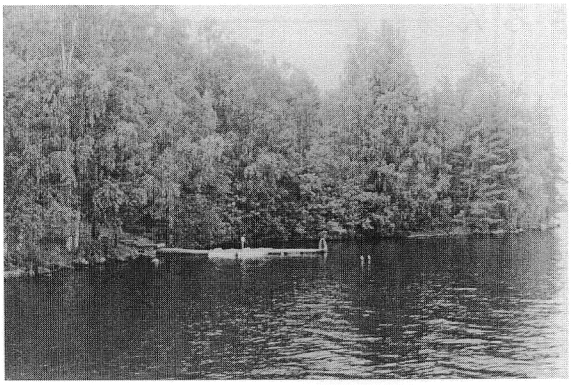

図3　会場・宿泊施設に接している湖.

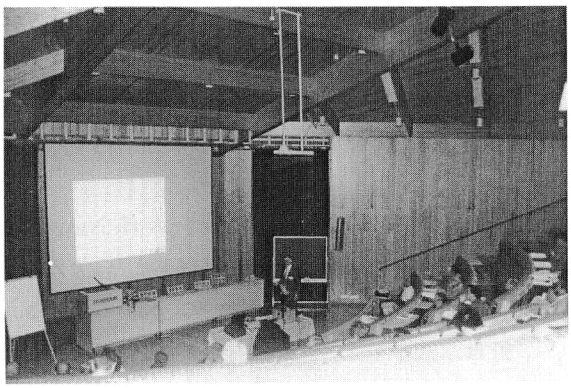

図2　会議場.

ているだけで，何か頭の中が活性化してくるような気分にさえなってきて，参加して良かったと思いました.

参加者の9割以上は大学などの研究機関の所属で，近い将来の応用を前面に押し出すというよりも，基礎的な事柄に重点を置いた内容が多かったといえるでしょう．ただし，基礎と応用，あるいは理学と工学の別というのは，そこに従事する人間が勝手に分類しているだけで本質的なものではなく，あまり意識するべきではないと筆者は思っています.

どんな会議でもそうですが，ここでも不満な点はありました．この会議は今年は一度しかないICO Bureau全体が集まる機会も兼ねていたせいか，招待講演者や座長は，ほぼいわゆる年配の重鎮クラスで固めており，質疑応答でも真っ先に彼らが発言する場面が多かったようです．また，多すぎる招待講演を削れば，もっと沢山の若手研究者を呼び込めたのではないか，との意見もありました．その点で，実際に自分で研究作業をしている若手が主人公になっている欧州光学会（EOS）のTopical Meetingとは趣が異なっていました.

会議のスケジュールは野外活動に十分な3時間の長い昼休みと30分の休憩をはさんで，1時間半のセッションを1日4つというのが基本です．いずれも長めの休憩時間にはテラスでもディナーテーブルでもそこら中で議論の輪ができていました．一方，森の中で野外活動の施設・環境は何でも揃っていますが，テレビや新聞もフィンランド語しかなく，ハイテク携帯大国とはいえ深い森の中でインターネット接続もなく，主催者側も気をつかってか，フィンランド文化の一端に接することのできるさまざまな催しを毎夜準備していました．季節はずれの低温の夜のSauna Sessionでは，本場の湖畔のサウナに各国の参加者が押し寄せて，素っ裸のまま水温15°Cの湖（図3）に飛び込む光景が繰り返されました．また，生バンドの伴奏で（なぜかフィンランドの国民的な音楽である）タンゴなどを踊るTango Dancing Sessionもありました．実行委員長たちは，年配の重鎮夫妻連中をダンスフロアに引きずり出して踊らせようとのたくらみで，会場にカップルのダンス教師まで準備していたのですが，いざふたを開けると，踊っているのはほとんど年配の夫婦だけというありさまでした．一番長くフロアに出ていたのは，途中から上着を脱ぎ捨てていたE. Wolfだったというのが衆目の一致するところです．筆者は翌朝7時に朝食に向かう途中で，前夜12時過ぎまで踊っていた，どうみても筆者よりは高齢のロシア人が「今からジョギングに行く」と言って走り出すところに出会わせ，次の瞬間には，すでにコートでテニスに興じているICO会長R. Dändlikerら4人を目撃しました．彼らには当然，時差ボケはないとは思いますが，同じスケジュールの会議が日本であったとして，私たちは一体どうしているだろうかと，ふと考え込んでしまいました．また，休憩時間のたびに夫人も交えて固まっている一団を見るにつけ，日本の光学界が世界の舞台で彼らと同じような立場で同じように行動するには，まだ時間がかかりそうだと思わざるをえませんでした.